

(1) 日本語教育における「論理的文章の組み立て方」の指導

日本語教育における「論理的文章の組み立て方」の指導

松 岡 弘

一 はじめに

シंगाポールからの二人の留学生チャー・タックキ
ヨン君とタン・メンウィー君とが本学の一九九一年度
の卒業式において、チャー君が経済学部学部生の総代
に、タン君が全学部生を代表し謝辞を述べる役に選ば
れたことは、留学生教育の一翼を担う筆者にとって殊
の外嬉しい出来事であった。一九九二年三月の卒業式
の当日、筆者は偶々海外研修に出ているこの晴れがま
しい式典に参列できず、帰国後にそれを知らされて随
分と悔しい思いをしたのだが、と同時に、筆者に強い
印象を残していった二人に関する思い出が、鮮やかな

記憶として甦ることになった。それは、以下に述べる
日本語の作文指導に関わるものである。

筆者は、本学の学部一、二年生の日本語教育を担当
しており、この二人を含む計十名の外国人留学生の日
本語クラスを一九八八年と一九八九年に受け持った。
学部正規留学生であるから、一般的にレベルの高いク
ラスであったが、その中でもこの二人が当初からトッ
プレベルの日本語能力を有していたことは言うまでも
ない。本学入学時の日本語の文章力的一端を示すため
に、二人が一年次の最初に提出した作文の冒頭部分を
本稿の末尾に示す。題は「日本へ来てからの一年」で
ある。(資料1。なお、資料として掲げた二人の作文

は、いずれも筆者が直しを入れる前の原文である)

このように、筆者は毎週のように作文を宿題として課しているが、二人のいたクラスでもそれを実行し、特に二年次では、後期三、四年での専門分野のレポート作成や卒業論文執筆の基礎となるようにと、論理的文章の作文指導に集中した。そして、七月までの夏学期はほぼ毎週書かせ、冬学期からは文章読解と関連させて二、三週に一回の割合となり、合計十四回、作文を提出させた。

チャー君とタン君(以下、T君、M君とする)は、実に対照的な文章を書いた。T君はミスの少ない、端正で模範的な文を書き、M君はミスは多いが、型にはまらない個性的な文を書き続け、次第に文章の魅力がその欠点を凌駕するようになった。この二人の対照的な作文が、筆者に文章構成における型と創造の問題を考えさせる契機ともなった。

本稿の目的は、当時から考えるようになり、今も実践している論理的文章の組み立て方に関する指導方法の理論的枠組みを示し、二人の留学生による実例によ

ってその有効性を検証することにある。今も実践していると書いたが、そのやり方は年々変化し、相変わらず決定版はない。また、理論的な枠組みといっても、当初から明確であったわけではなく、かつては随分と漠然としたものであった。だが、こちらは、年とともに一つの確信へと固まりつつある。本稿の前半では、それをまず示し、後半で指導の実際を紹介する。

なお、実例を示すに網羅的あるいは統計的でないのは、筆者の資質と手法のしからしむるところであるが、それ以上に、冒頭に記した出来事と二人の際立った対照が本稿執筆の直接の動機となっているからである。指導原理そのものの有効性の包括的な検証は、いずれ稿を改めて論じたいと考えている。

二 論理的文章の作文指導の範囲

日本語を母語としない外国人留学生が大学に入学して、日本人と肩を並べて勉学する際に求められる日本語能力には、いろいろなものが考えられるが、その中でも書く技能は、レポートや卒業論文といった形で勉

学の成果を示さなければならぬ際に不可欠のものである。そのため、大学入学前後の日本語教育でも、そこに向けての作文教育の実践報告がかなりあり、「上級段階における表現指導」とか「論説文を書く作文指導」とかいった表題のものは、大体、そうした能力の養成を目的としたものと考えてよい。⁽¹⁾

また、こうした技能は外国人のみでなく、日本人学生にも必要だという観点から、例えば、『理科系の作文技術』『レポートの組み立て方』といった本が書かれる理由もそこにあるうし、学年の後半ともなって大学内の書籍部に『学術論文の技法』といった類の本が並ぶのも、そうした事情を反映するものであろう。⁽²⁾

筆者は、土部弘(一九九〇)のまともに従い、今回の考察の範囲を以下のように設定する。土部は文章表現の様式を「日常的文章」「論理的文章」「文学的文章」と三大別し、論説文・評論文などの「論理的文章」は「論理性が特立した専門的な文章様式」であり、それは(1)「記録文・報告文(ないし通信文・報道文)」、(2)「説明文・解説文」、(3)「論説文・評論文」などにわ

たる、とする。そして、「いわゆる『論文』には、『論説文』ないし『評論文』を中心とするものもあれば、『解説文』を中心とするものもある。また、非常に多くの『記録文』を含むものもある」と述べている。⁽³⁾筆者が検討の対象とするのは、土部のいう「論理性の特立した専門的な文章様式」としての「論理的文章」であり、簡単に言えば「論文」の文章である。

ただ、「論文」そのものの作成指導でなく、日本人学生を対象とした参考書に必ず含まれるようなテーマの設定、資料の収集、文献の引用や注の付け方といったことまでは、今回は立ち入らない。また逆に、論理的文章を「論説文」とせまく限定して論ずることもしない。土部によると、「論説文・評論文」は、「あるものの方・考え方がなりたつすじみちを示して、その見解の正当性を認めさせ、その意向に同調させることを、基本的な表現機能としている文章」であるから、論説文をもって論理的な文章一般を代表させることはできないからである。

結局、筆者の考える論理的文章の作文指導とは、学

術論文執筆の土台となる、あるいはその出発点としての論理的文章の組み立て方指導である。これは木下(二九八二)で言えば、三・四章の「文章の組み立て」と「パラグラフ」に相当する内容である。⁽⁴⁾

三 日本語教育における論理的作文指導の特殊性

筆者は、『日本語教育ハンドブック』(一九九〇)の担当執筆箇所において、書き方指導では次の三点を区別するのが実際的であるとした。すなわち、

- ① かなと漢字を用い、表記に則った正しい文章が書けること
- ② 適切な語彙や表現を用い、文法的に正しい文章が書けること
- ③ 文章を通じて、伝達および思考内容の表現ができること

がそれであり、理論的には、③の作文をもって書き方指導の中心となすべきであろうが、実際には①→②の指導は渾然一体となつて行なわれることが多いことを

指摘しておいた。⁽⁵⁾ 実際、留学生を対象とした作文指導の難しさの多くはここにある。確かに、学部⁽⁶⁾の二年生ともなれば、①、②の問題は相当克服されてはいるが、日本語が外国語であるかぎり、③のみに集中できるわけではない。

したがって、大学における留学生のための日本語作文教育の最大の特異性と課題は、留学生が①、②の重荷を背負っていることを認識し、その指導と同時にレポート作成や卒業論文執筆の土台となる「論理的文章」の書き方を、できるだけ少ない負担で効率的に習得させることにある、ということになる。

このことについては、日本語教育の分野で実践報告があることは前節でも触れたが、目下のところ、様々なレベルでそれぞれのアプローチや工夫を出し合っている現状といえよう。中でも、小宮(一九八七、一九八九)の初級上、中級段階での一連の試みは方法論が緻密で、実践的な内容を伴っているので、注目に値する。小論は、それよりも上級の段階の作文指導の一端を報告し、その指導理念を提案するものである。

四 論理的文章作文指導の基本的理念

筆者の考える論理的文章の作文指導における基本理念は、次の三つである。

A 型の習得と規範的・制限的な文章構成指導

B 型からの離脱と創造的・非制限的な文章構成指導

導

C 簡便で応用範囲の広い文章構成指導

若干補足して言い換えると、次のようになる。大学で学ぶ留学生ともなると、論文を書くに際し、何について書きたいか、いわゆる主題・構想と称されるものは、漠然とはあっても大体決まっているだろう。問題は、それが正確に（つまり、意味内容が誤解されないように）かつ効果的に（つまり、書き手の意図や考えが、より強く印象に残るように）伝わるためにどのように文章を組み立てていくかであるが、それには、普通一般に用いられる論理の流れに沿って文章を構成するのが最も無難であり、そのためには、何れともある、論理の流れの型を習得しなければならない。それ

がAの意味するところであり、Bの段階は、Aを踏まえた上で行なわれる。Cの意味するところは、そのような指導理念は小論文のみならず、レポート、卒業論文執筆にも適用できる応用性を持ち、かつ、限られた時間内で指導・習得できる簡便なものでなくてはならない、ということである。

では、型とは何か、規範的とは何か、創造的とは何か、ということになるが、具体的なことは次節以降に述べるとして、筆者はこの問題について、林四郎氏の諸論考から大きく影響を受け啓発されてきたので、ここではそのことに触れておきたい。林氏は『基本文型の研究』や『文の姿勢の研究』といった著書の書名に示されるごとく、どちらかといえば型を重視する文章論なり作文教育論なりを展開してこられたと、筆者は理解している。ただ、筆者には、その全体像を誤りなく正確に伝えられるだけの自信はないので、今回は氏の「文の構話姿勢」（一九八六）に依拠しつつ、本稿に関係する部分を取り出してみる。

氏は、言語単位（音節、単語、文、文章）が実際の

言語表現として実現するときに、ひとつずつ上位の単位に組み込まれていくありさまを「姿勢」という言葉で表現する。例えば、文については「……一文で文章を完成させることもあるが、多くは、いくつも続くことによつて一つの文章となる。文が文章に組み込まれて、大きな表現目的を完成させるための姿勢を文の構話姿勢と呼ぼう」と述べる。氏によれば「構話」の「話」は *discourse* に当てたものであり、これは、いわゆる「文章」も指している。文の構話姿勢には二種が区別され、「まとまったことを言おうとして、文を次々と生産していく間には、文章全体の構造を意識し、今発話する文が、その構想の中でどこに位置づくのかと意識して発話される文と、そういう気張った意識なしに、話の流れがさしかかったその場での必要にだけ応じて、伸び伸びと発話される文と、基本的に二種類の文を生じてくる。その二種類が入れかわりながら、文の生産が進んで行くのが一般の文章」であるとし、前者を「構えの文」、後者を「流れの文」と、氏は名づける。

筆者は、林氏のいう構えの文が特立した文章が「論理的文章」ということになるのだと考えるが、氏は、韓愈の「雑説下」、枕草子の冒頭、さらには、源氏物語の須磨の巻の冒頭にも「構え」があるとされる。と同時に氏は、構えによつて議論の筋は支えられるが、「文章のおもしろいところ、よくわかるところ、思わず同感させられるところといった部分は構えの文に入っていない」、「心情に訴える効果的な部分は、これらの構えの文でないところにむしろあるように思われる」とも述べておられるのである。

以上紹介した林氏の表現を使って、筆者の意図する論理的文章指導の基本理念を言い換えてみると、次のようになろう。まず、「構えの文」を意識的に把握し、それを型として習得し、文章を組み立てること。これがAの段階である。次いで、構えの文によつて枠組みを与えられた書き手の主題をより効果的に伝えるために、型を離れる「流れの文」の役割に注目し、文章構成に生かすようにする。これがBの段階である。

五 論理的文章の基本的な組み立て

筆者は、次の三点を想定する。

主題の構想

全体構造

段落構成

構想を練る、主題を設定するといった作業は、課題を与えられて生ずるものであれ、書き手の内的衝動として湧き起こってくるものであれ、論文執筆の大前提となるものであるから、それなしには全体構造も段落構成も考えようがない。従って、初・中級段階の日本語教育では、そこから出発することが多く、小宮（一九八九）の「ブランの指導」などがそれに当たる。だが、本稿の場合は主たる対象が大学（院）生であることから、主題設定は書き手の脳裏において既に完了しているものと想定し、次のステップの指導方法から述べる。

五―一 全体構造——序論・本論・結論——

構想・主題が固まり、伝えたいこと、主張したいこ

とが明白になったところで、書き手はそれをひとまとまりの文か、短い文章に表現し（Ⅱ主題文、木下（一九九〇）⁶）、文章の最初にぶつけるか、あるいは文章の終わりに持ってくるかを考えることになる。文章論では、この主題文をどこに置くかで、頭括式（初め）、両括式（初めと終わり）、尾括式（終わり）といった区別をするようだが、⁷名称は何であれ、この冒頭の部分と結尾の部分とに挟まれて、本論が存在する。

筆者は、この序論・本論・結論の三段構造を、基本的な全体構造とする。これは、大学レベルの留学生であれば、母語の違いをこえて無理なく理解できる分類のほずである。よく「起承転結」が文章構成の有力な類型のように言われ、外国人向けの作文教科書にまで取り入れられたりしているが、木下氏も指摘するとおり、レポートや論文とは無縁のものであり、まして、日本語指導の中ではまず必要のないものである。また、文章の全体構造を言語の違いによって類型化する試みもあるが、⁸これについては、筆者は目下の所、差異よりも共通なるものにより大きな関心がある、とだけつ

け加えておこう。

ここで大切なのは、構想・主題を文章化する、つまり主題文を組み立てるといふ作業もさることながら、それを冒頭に置いた場合、結論はどうなるのか、あるいは逆に、結びにそれを持ってきた場合、序論はどういう形・内容になるのか、ということである。これは「構えない文章」ばかり書いていると身につかぬことであり、尻切れとんぼの文章や、ぶっさらばうな始まりの文章ができあがるのは、そのためである。

序論と本論とは、明らかに一定の呼応・対応関係(あるいは緊張関係といってもよい)の型を持っている。両者がうまくかみ合わなければ、本論を両側から支えることはできない。つまり、ある決まった型を持っているのである。では、その型とは何か。

五―二 段落構成―並列・対比・因果・論型―

主題文であれ、主題文を含まない導入であれ、ともかく序論が書かれ、続いて結論の見通しがついたら、本論を書き始めることになるが、その本論はどのような組み立てられていくのか。これが段落構成である。

木下氏はレポート文については、(i)調査・研究のやり方と、(ii)それによって明らかにした事実を述べる部分を本論としているが、⁽⁹⁾論理的文章一般にこれを適用することはできない。一方、長い伝統を持つ国語教育においては、より一般的な文章を対象にして、かなり細かく段落の分類と配列の類型化が行なわれている。⁽¹⁰⁾(例えば永野(一九八六)は、文と文の接続関係の類型として、展開型、反対型、累加型、同格型、補足型、対比型、転換型、飛石型、積石型、の九つの型を提示している。これは、そのまま段落間の接続関係にも適用されるだろう。)しかしながら、これらの類型化は、すでに書かれた文章を分析し、その特徴づけを行なうのには役立つかもしれないが、これから我々が何かについて書こうとする際、どういう心的態度で段落を構成し文章に組み立てていくのかについては、あまり具体的な指針とはならない。

実際、文章読解という過程で分類されていく段落と、文章創出の過程で組み立てられていく段落とは、同列には扱えない面があり、混乱を避けるためにも後者の

段落を特にパラグラフと呼んだりするのだが、本論でいう段落は、もっぱら後者の意味においてである。

筆者は、本論内部の段落（小段落）の組み立て、および、序論・本論・結論（大段落）の組み立ては、大きく分けて次の三種の型が書き手の脳裏にあり、それらを使い分けて、あるいは組み合わせながら、行なわれていくと考える。

- A 並列（・同列）
- B 対比（・対立）
- C 因果（・呼応）

並列（・同列）とは、物事と物事とを同類・類似のものとして捉え、並べて叙述したり、分類したり、あるいは物事を言い換えたり要約したりしようとする書き手の心的態度が、文章表現となって表れたものをいう。物事を時間的な順序で、あるいは空間的な位置関係に沿って描写するといった叙述形式もこれに含まれる。

対比（・対立）とは、物事と物事とを異なるもの、対立するものとして捉え、両者を対比・対立させながら

示そうとする書き手の心的態度が、文章表現となって表れたものをいう。事実を述べるとか人の意見を引用するとかした後に、異なる意見や疑問を加え、さらには反論をするといった叙述形式もこれに含まれる。

因果（・呼応）とは、物事と物事とを因果的につながるものとして捉え、示そうとする書き手の心的態度が、文章表現となって表れたものである。結果・結論を示してから、その原因に言及する、あるいはその逆、さらには、問題や疑問を提起した後、その解答・解決を示すといった叙述形式もこの中に含まれる。

筆者は、論理的文章の枠組み・骨格は、書き手が上の三つの相互関係を明白に意識し、そのための言語形式を適切に使用して全体構造を考え、段落構成を行なっているといえ、分かりやすい論理的文章が組み立てられると考える。そして、そうした場合に実際の文章に用いられる言語形式の型（これを、筆者は「文型」に模して「論型」と呼ぼうと思う。林氏の「構話姿勢」に合わせるとすれば「話型」となるのだが、ここでは「会話」の型と誤解されそうなので用いない）を駆使でき

るようになっていけば、更に容易になるだろう。

紙面の関係で、本稿では筆者の考える「論型」を具体的に示す余裕がないが、例えば、『理工学を学ぶ人のための科学技術日本語案内』の中の「基本的表現・文型」は、理工学の分野における文レベルでの論型ということになるであろう。

ただ、次の点は確認しておきたい。論型は基本的に規範的かつ制限的であり、表現のため道具にすぎない。これを欠いては論理的文章は組み立てられないが、かといって、これだけで文章が創出されるわけではない。表現しようとする意志があつてこそ生まれるのである。そして、その表現しようとする意志も、物事と物事とをいかなる関係で捉えるかという自覚的な心的態度と論理的枠組みがなければ、実際の言語表現に結実しないだろう。並列・対比・因果の三つの型を設定した意味は、そこにある。

また、この三つの型は、理科的な文章に限らず、論理的な文章一般の土台となり、さらには一般的文章や文学的な文章をも貫いて存在する、つまりは、規範的

であつて同時に創造的、制限的であつて非制限的な性格を持つというのが、筆者の考えである。これについては、稿を改めて論ずることになる。

五―三 読解段落と作文段落

読解と作文とは同列に扱えない、従つて、段落の捉え方もそれぞれで異なるという前提で述べてきたが、どうもそうではないらしい、ということを経験してきたが、加えておく。

B・L・カレル(Carrel)の論文に、論文構造には五つのタイプがあり、それが読解力に影響する、とB・J・F・メヤー(Meyer)が指摘していることが紹介されている。その五つの基本的なタイプとは、causation, comparison, problem/solution, description, time-orderで、メヤー等によると、読んだ内容を時を置いて書かせた際に、元の文章の構造を自覚して読んだ者はそうでない者よりも、その内容をはるかに正確に詳しく再現できたという。さらにまた、descriptiveな構造の文よりもcomparisonとcausationの構造の文の方がより強く記憶に残る、とも報告

している。⁽¹²⁾

この調査結果は、この五、六年、筆者が進めてきた論理的文章の指導理念の妥当性を強く支持してくれる内容である。メヤーが五分類としたのを、筆者は三分類にしているが、comparison が対比、causation が因果で完全に一致し、違いは、筆者が description と time-order を並列でまとめ、problem/solution を因果で一くくりにした点である。

重要なことは、読解と作文における全体構造と段落構成とが、結局三ないし五の少ない類型にまとめられること、その中でも対比と因果がより強い影響力、構力力を有するという点である。つまり、対比と因果は、より重要な枠組みであり構えであり、descriptive と time-order の論型は、よりマイナーな枠組みであり構えということになる。

このように、メヤーの研究と筆者の手法をつき合わせて考えると、読解と作文が無関係ではあり得ないことがわかるが、今回は両者の関係を詳しく論ずる余裕はない。ただ、少し触れておきたいのは要約作文のこ

とである。要約作文は、読解と作文の中間に位置すると考えられ、両者の共通性が最も端的に表れるものであり、また、文章の論理的構成が最も要求されるものである。その作業の過程において、筆者のあげた段落構成の三つの型は読み手（同時に書き手）にとって強力な武器になるであろうと筆者は考える。

六 論理的文章の組み立て指導の実際

一九八九年四月から、筆者はまず学部二年生十名を対象にして、論理的文章を組み立てる作文指導を始めた。最初の年であり、かなり気合いを入れて指導に当たったので、学生の書いた作文は、すべてコピーをとって残してある。今回は、その中からT君とM君の分を取り出して検討する。

六一 最初の作文

四月の第一回目は、筆者の用意した教材は渡さず、市販されている教材の中の一課をそのまま使い、その教材の指示に従って、八百字の作文を宿題として課した。学生たちは来日後すでに二年を経っており、書かれ

た日本語自体にはあまり問題がない。「これに対して、もちろん、だが、そして、しかし」といった接続詞も結構使いこなし、段落間のつながりにも矛盾はなく、文章全体のまとまりもある。つまり、「日常的な文章」はすでに会得しているのである。だが、何と何が比べられ、何が事実で何が意見かといったあたりはない。それに、「起承転結」が日本人の文章だと入学前の教育で教えられてきたためか、文章の終り近くになって、日本の話から急に自国の例に飛んでしまったりする。改めて論理的文章の指導の必要性を痛感させられることになった。T君の書いた「余暇活用法」を参考に載せる。(資料2)

六―二 序論と結論の呼応

筆者は、三週目より自分で編集した「文章構成法」という部内教材を用い、論理的文章を、並列・対比・因果の論型、及びそれらの混合型に従って書くよう、指導を開始した。一―三課が並列、四―六課が対比(と並列)、七―九課が因果(と並列・対比)となっている。教材の内容をすべて紹介するスペースはないの

で、参考までに、二課のモデル全文を示す。(資料3)

さて、一課のモデル文の表題は「図書館」で、本論の段落は時間の流れに沿って構成されている。学生への課題は「私の図書館」だった。これは、自分と図書館とのつき合いを小学校、中学校、高校へと時間をたどってつづればよいから、本文の組み立て自体は難しくなく、あまり特徴も出ない。だが、筆者を驚かせたのは、M君の冒頭部分であった。T君とM君の冒頭と結びを示す。(資料4)

二人とも序論と結論の呼応に配慮していることがわかる。だが、それは対照的である。T君がまとめ(結論)から入り、その言い換えとしての確認で結ぶのに対し、M君は意表をつく比喩を持って導入し、それと対比をなす結論で結ぶ。これは、並列(ここでは、言い換え)と対比が序論と結論の間でも存在することの好例でもあるが、同時に、M君について言えば、型に従うより、型を破るタイプであることを如実に示している。

六一三 本論の段落構成——並列——

第二課は、並列の組み立て練習であり、課題は「受験戦争」である。T君は、課の趣旨に沿って、「まず」「また」「さらに」「そして、最も悲惨なのは」といった接続表現を用いて模範的な本論構成をし、序論と結論についても問題提起とその解決という典型的な型（筆者は、これを「因果」としてくくっている）を採用して、全体をまとめる。一方、M君は問題点を並べるのか、それとも日本との対比で捉えるのかが不明確なまま書き始め、構成に破綻を来す。着想だけに頼って、型を軽視するM君得意の手法は、ここでは通用しない。両君の本文を示す。（資料5）

六一四 対比と並列

第四課は、対比と並列の組み合わせである。課題は「日本へ来るまでの自分と来てからの自分を対比しながら、並列的に述べよ」というものである。T君は、すっかり教材の意図を理解し、論型を自家菜籠中の物とし、模範的な文章を仕上げている。M君の導入はあ

いかわらず卓抜である。だが、本論の構成は、T君は

どには整わない。自由奔放に書く癖と、型に合わせようと努力がぶつかり合う状態がかなり続くことになる。両君の冒頭と結びを示す。（資料6）

六一五 対比と因果と並列

指導を始めてから三か月が過ぎ、第九課を終えた課題は「日本人と〇〇〇」で、「ある事柄をめぐって日本人とそれ以外の国民とを対比的に論じ、対比の生ずる理由を述べよ」というものであった。夏休み後に二人の提出した作文の題は、期せずして「日本人と色」となっており、T君は日本人とヨーロッパ人、M君は日本人と中国人とを対比して文章を組み立てている。T君のうまさは相変わらずだが、M君も段落構成に慣れて来た。資料5と比べるとそれがよくわかる。二人の文章の導入部と本論の各段落の最初の文を示す。（資料7）

以上、わずかの例しか検討できなかったが、T君とM君とが、三つの型（並列・対比・因果）および論型を使って、T君がいち早く、そしてM君が型に従って書くことに戸惑いながらも、論理的文章組み立ての手

順をマスターしていく様子が示せたと思う。

六―六 指導の第二段階

その年の後半は、難度が高く、かつ学生にとって挑発的な内容の文章を取り上げ、文章を正しく読む作業と同時に対立する意見や議論を喚起し、課題として引用、要約、事実と意見の区別といった内容を含む文章表現指導を行なうことにした。取り上げた文章は、和辻哲郎『風土』の中の「モンスーン」、丸山真男『超国家主義の論理と心理』、内村鑑三『代表的日本人』より「西郷隆盛」、そして渡辺利夫「日本は最悪の選択をしている」(雑誌『世界』所収論文)などである。この段階での新しい問題点については稿を改めなければならぬが、筆者は、ここでも序論・本論・結論の全体構造と並列・対比・因果の相互関係を念頭に置いて、文章を組み立てるように指示をした。

最後に、年が明けて「西郷隆盛」を読んだ後に「自国の歴史上の偉人を取り上げ、その功罪を述べよ」という課題で書かせた両君の文章の主要部分を示す。(資料8)。興味深いのは、これまで序論や結論に淡白

であったT君が、ここではその部分にかなり工夫を凝らし、逆に本論のほうに並列段落中心の「流れの文」的となり、結論も情緒的になったことである。一方、序論の表現に人の意表をつくことの多かったM君が、ここではそれをあっさりとし、本論と結論の方は、因果と対比(これには事実と意見の対比も含まれる)を駆使して話を展開していることである。これは、同じ人物に対する見方の相違(好意的か批判的か)が文章構成に大きく反映したものであろう。序でに、二つの作文に対する筆者のコメントも載せておいた。普段はこれほど長く書くことはないが、二人のが力作だったので、つられて長くなったのである。現状肯定的なT君にはやや辛口に、批判的なM君にはやや現状肯定的な内容にして対比形式をとったのがミソ、と言えばそう言えなくもない。

七 おわりに

卒業式の晴れの壇上に二人して立つことになったシ
ンガポール留学生、チャー・タックキョン君とタン・

メンウイー君の快挙に触発されて本稿をまとめることになったが、このような形で発表するにはそれなりの意図もあるので、ここで整理しておきたい。

第一は、これまでの日本語教育における作文教育や文章理論の試みや成果の発表では、平均的な能力の学生何人かを集めて共通の課題について書かせ、その結果を数量的に処理してあれこれ論ずるとするのが一般的な手法のようになっているが、筆者はそれとは全く逆に、トップレベルの学生にじっくりと時間をあたえて書かせ、その進歩・向上を少し長い経過の中で眺めてみたかった、ということである。

第二は、筆者の年来の持論である、型の習得なくして応用はない、規範なくして創造はないということ、論理的文章指導においても確認してみたかったことである。日本語教育におけるいわゆる基本文型が、さまざまな文の創出の基本であるごとく、論型もまた、文章創出の出発点であるに違いない。ただ、本稿では、筆者は論型をかなりあいまいに使ってきた。論型とは、大段落レベルでは、〈論文〉型、とでも言った方が適切

であり、小段落レベルでは、〈論〉文型と理解する方がよいようである。本稿での実例は、主に前者の意味での論型となった。論型の具体的な整理と提示は、筆者の次の課題である。

第三は、林氏の「文章のおもしろいところは、構えの文に入っていない」という言葉の重さである。それは渡辺実氏の「文章は……前文への程よい密着性と前文からの程よい離脱性とを、ともに備えていなければならず」という指摘にも通ずる考えであり、このことが今回、T君とM君の文章を対比しながら論じた最大の動機でもある。もし、M君の文章がその文法的なミスの多さにもかわらず、読み手に訴える力が若干でも大きいとするならば、それは型からの離脱という側面故ではないだろうか。しかし、型からの離脱が効果を持つのは、その根底に離脱すべき対象としての型があればこそである。作文指導を通じて、筆者が絶えず学生に伝えようとしたのは、結局、そのことであった。

筆者は、二年にわたる日本語指導で、文法ミスや段落構成に乱れの目立つM君の作文に対しては、当初は

敵しい評価をつけて返却することが多かった。このことは、プライドの高いM君にはかなりこたえたらしく、後に、二年間で印象に残っていることは何かと聞いたとき、自分の作文にいつまでたってもAをつけてもらえないことだった、と答えている。筆者には予想外の反応で、評価を下すことの重さを深く思い知らされたが、卒業式の壇上で、彼のその悔しさは、果たして、快い思い出に変じてくれたであろうか。(了)

- (1) 参考文献(1)(5)(7)(10)など。
- (2) 参考文献(3)(4)(9)
- (3) 参考文献(16)七〇八頁。
- (4) 参考文献(3)三〇〇八八頁。
- (5) 参考文献(14)七五頁。
- (6) 参考文献(4)四一〇四二頁。
- (7) 参考文献(2)一五六頁。
- (8) 参考文献(13)(23)など。
- (9) 参考文献(4)九五頁。
- (10) 参考文献(2)一三〇〇一三四頁(15)一〇五〇一〇八頁、(19)六八〇八八頁、一三五〇一四八頁など。

- (11) 参考文献(20)一四七〇二一六頁。
- (12) 参考文献(22)五〇〇五五頁。
- (13) 参考文献(21)九七頁。

参考文献

- (1) 飯野清士(一九八七)「論説文を書く作文指導の試み——学部で論文を書く前に——」『日本語学校論集』14
- (2) 市川孝(一九七八)『国語教育のための文章論概説』教育出版
- (3) 木下是雄(一九八二)『理科系の作文技術』中央公論社
- (4) ———(一九九〇)『レポートの組み立て方』筑摩書房
- (5) 木村宗男(一九七六)「進んだ段階における理解と表現」『講座日本語教育』12(木村宗男『日本語教授法』(一九八二)に再録)
- (6) 小宮千鶴子(一九八七)「文章構成法による作文指導の試み——初級後半における内容作り・構成を中心にして——」『日本語学校論集』14
- (7) ———(一九八九)「中級段階におけるプランの指導」『日本語学校論集』15

(17) 日本語教育における「論理的文章の組み立て方」の指導

- (8) ——— (一九九二)「日本語教育における初級段階の作文指導」『中央学院大学論叢』第4巻第2号
- (9) 斉藤孝(一九七七)『学術論文の技法』日本エディタースクール出版部
- (10) 佐久間まゆみ(一九八九)「作文力の養成法——段落作文と要約作文——」『講座日本語と日本語教育13 日本語教授法(上)』明治書院
- (11) ——— (一九九二)「文章構成の型と文の連接関係」『表現指導の原理と方法Ⅱ 表現学大系各論第30巻』教育出版センター
- (12) 佐久間まゆみ(編)(一九八九)『文章構造と要約文の諸相』くろしお出版
- (13) 杉田くに子(一九九三)「日本語母語話者と中・韓日本語学習者の論説文に見られる文章構造の特徴」『平成五年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
- (14) 日本語教育学会編(一九九〇)『日本語教育ハンドブック』大修館書店
- (15) 永野賢(一九八六)『文章論総説』朝倉書店
- (16) 土部弘(一九九〇)「論説・評論の表現特性」『評論・論説の表現 表現学大系各論篇第27巻』教育出版センター
- (17) 林四郎(一九七三)『文の姿勢の研究』明治図書
- (18) ——— (一九八六)「文の構話姿勢」『漢字・語彙・文章の研究へ』明治書院
- (19) 森岡健二(一九六三)『文章構成法』至文堂
- (20) 山崎信寿・富田豊・平林義彰・波田野洋子(一九九二)『理工学を学ぶ人のための科学技術日本語案内』創拓社
- (21) 渡辺実(一九八五)「文章のつかみ方」『日本語の教育 応用言語学講座Ⅰ』明治書院
- (22) Carrel, Patricia L. (1987). Text as Interaction: Some Implications of Text Analysis and Reading Research for ESL Composition. Writing Across Languages: Analysis of L2 Text. Addison-Wesley Publishing Company.
- (23) Kaplan, Robert B. (1987). Cultural Thought Patterns Revisited. Writing Across Languages: Analysis of L2 Text. Addison-Wesley Publishing Company.
- (一橋大学教授)

資料 1

丁の作文 「日本に来てからの一年」(冒頭部分)
 「はい、はい・・・」と言っても、相手の話しはちっともわからないその日本語のレベルで来日してから、段々「日本語はわかりません。英語は話せますか。」、ほんのちよっと話せるようになって日本語で日本人と会話ができ、テレビ番組の内容がわかるようになるまでには一年が立った。この一年間に楽しい時はもちろんあったが、苦しい時も少なくはなかっただろう。
 日本についたばかりのその晩のことを思い出した。成田空港まで迎えに来てくれた先輩に連れられて、三、四時間もかかって、やっと住むことになっている寮の正門についた。(後略)・・・

Mの作文 「日本に来てからの一年」(冒頭部分)
 気がつかないうちに、桜はまた咲いた。
 桜をはじめて見たのは、ちょうど一年前のことだった。あの私たちに寮を案内して下さっている先生は一生懸命に荷物を運んでいる私たちに向いていきなり言った。
 「ほら、見て。桜ですよ」
 深夜に、私たちの傍らに確かに一本の木が見えた。
 「あ・・・」
 これは、私の最初の日本文化と接触することとも言えるだろう。(後略)・・・

資料 2

丁の作文 「余暇活用法」
 日本人は「働きバチ」と世界に知られている。これらの働きバチたちは、一時的に世界各国にまねをされていくが、今では、彼らをかませぬという声が外国でも日本国内に高まって来ている。
 これに対して、多くの制度がとられているが、その中には、週休二日制がある。この制度を実施してから、確かに「働きバチ」により多くの余暇を与えたが、遊び方を知らない人達がおおぜいいるので、休日在家でごろごろして過ごす人がほとんどのようである。休日を利用して出かける人がいても、多くの場合において、人混みの行楽地や海水浴場といったところに流れ込むことになってしまっているのである。
 もちろん、たまには、家族そろって行楽地に出かけていくことは親子・夫妻のコミュニケーションであって大変よいことであるが、いつもそうやると、やはり経済的ではないから何らかの他の方法を見つければならないと思う。
 一番良い余暇利用法という、自分の趣味に使うことであろう。
 ・・・・(中略)・・・
 私の国では、たくさんの会社が生産力や他の会社との競争力を高めるために、いろいろな行動をした。中には、日曜日も営業しはじめた銀行もある。それに長い連休を取ることができないこともあって、ちょうど日本での状況と反対である。
 本当に、世の中のことはときどき非常にひどく私を感じる。

資料 3
 第2課モデル文 豊田利幸「学はひとつなり」
 何かに分け分類するという事は、一面では非常に便利であるが弊害も多い。その最たるものは学問の分類である。
 私がね私はサイエンスを科学と訳したのは大きな誤りであると考えている。この訳語は分化の学という、権力者あるいは支配者にとって都合のよい考え方を人々の間に定着させてしまった。
 それはまた、学問することを職業の一つとみなし、その社会的機能特定することにつながった。十八世紀から十九世紀にかけての富国強兵の時代、さらに最近の科学技術立国論の風潮にいたるまで、この考え方は、統治する側に徹底的に利用されている。
 さらに悪いことに、学問の分類は、学問する人々をもその分野に従って分類し、それを半ば固定化してしまった。いまでもなく、生きた人間は一個の存在であって、いかなる意味においてもそれを分類することはできない。
 学問の分類の愚は物理学と生物学が現代では大きく重なり合っていることに端的に見られる。現に、「生命の物理」は現代物理学に含まれる。
 それ以上に重大なのは、従来、価値観や倫理観を排除するものと規定されてきた自然科学の概念が、今や根本的に問い直されるようになったことである。・・・(中略)・・・
 核時代を越えるためには、学問するものは、学はひとつなり、というサイエンスの原点を確認し、そこから出発することが必要であろう。

資料 4

丁の作文 「私と図書館との出会い」(冒頭と結び)
 私はよく図書館へ行く。でも、小学校、中学校、高校、大学、それぞれの時期において図書館というところは私に取って持つ意味が違うのであるから、当然、図書館に対する気持ちも、それぞれの時期によって異なってくる。・・・
 このように、図書館という場所は私の学生時代においてとても重要な意味を持った。それは、ただ本を読む、本を借りる所だけではなく、私の職場でもあり、遊び所でもあった。まさに、図書館とともに成長してきたといえるであろう。

Mの作文 「図書館の鬼」(冒頭と結び)
 図書館には鬼がいる。その怖さは校内に響き渡っていた。知らない人はいなかった。それは高校時代の話しだった。恐ろしい話しだった。・・・
 今まで、私はまだ鬼のことを懐かしく思っている。なにしろ、鬼のいない図書館に入ると、何となく中身が足りないなあという感じがするからである。鬼のことを思い出すたびに、図書館との関係は親しくなる。

資料 5

丁の作文 「受験戦争」(本論の各段落の最初の文)
 まず、受験戦争の主な被害者はこの世代の子供たちであろう。受験戦争に勝つために、しばしば親は自分の子供を早くから、予備校に行かせたり、家庭教師を雇ったりしている。・・・
 また、学校では、同級の間の競争は想像以上に激しい。この不健康な競争の下で利己的、功利的、虚偽的な人間を作り出している。
 さらに、学校教育も受験のために行われる。学校側は試験に出るものだけ生徒に教え、生徒の方も受験のため、教えられたものを、理解したかどうか関係なしに、一生懸命に覚えるだけだ。・・・
 そして、最も悲惨なのは受験戦争に負けた人達のことであろう。・・・
 (下線は筆者が施したものを、右の資料も同様)

Mの作文 「受験戦争」(序論・本論の各段落の最初の文)
 受験戦争は日本独特の現象ではないだろう。・・・
 ただ、日本と違うことは、向こう(=シンガポール)のは日本の受験戦争のようにそんなに激しいものではない。・・・
 とは言え、向こうでも、受験生にとって、受験というのは、学生生活の最も重要なことであろう。・・・
 更に、一発で大学へ行けるかどうか決めるということは、明らかに大学まで以前の成績を完全に無視していることがわかる。・・・
 受験ということが戦争と呼ばれるようになったことについて考えなえなければならないと思う。・・・
 しかし、こういう考え方はおかしくないか。・・・

(19) 日本語教育における「論理的文章の組み立て方」の指導

資料 6

Tの作文 「20才からの人生」(冒頭と結び)
 半年前、22才の誕生日を祝った。これは日本で過ごした3つ目の誕生日であった。その日に、過去の2年間を振り返って、いろいろな楽しい経験やいやなこと知り合ったおもしろい人物を思い出しながら、自分がどう変わって来たかを分析してみた。・・・
 これから、まだ2回の誕生日をここで迎えないといけない。その時の私はどうなっているかわからないが、自信を持って言えることは、その私はきっと今と比べると、もっと成長していることである。そして、変わらないことは、日本に来てよかったと思うことであろう。

Mの作文 「井戸の外の世界」(冒頭と結び)
 蛙はずっと井戸の中に暮らしていた。外の世界についてまったく知らなかった。あいつにとって、空は井戸の口ぐらいの大きさで、自分は宇宙の主権者であった。
 私もあの蛙のようである。・・・
 私は来日する前に一度もシンガポールから出ることがなかった。思想とか見方は偏っていることは言うまでもない。だから、外国に住むというチャンスを与えてくれて、自分の考え方は少しでも成熟できるということは幸いなことと思うのである。

資料 7

Tの作文 「日本人と色の好み」(導入と各段落の最初の文)
 一か半月のヨーロッパ旅行をして、日本に戻って来て、ヨーロッパ人と違うナアとまず思ったのが、色への好みである。ヨーロッパの町を歩いて行けば、身の回りの人達はほとんど色のあざやかな洋服を着ている。・・・
 ところで、日本人はどちらかといえば、暗い色、黒色や茶色やグリーンなどに好みがあるらしい。町を歩いている人を見ると、・・・この色の好みは、服装にだけ限るものでなく、他の所にもよく表れている。家を考えて、・・・
 これに対して、日本式の家は、木そのものの色のままか、それとも茶色で仕上げるのが普通であろう。そして、植木、・・・

Mの作文 「日本人と色」(導入と各段落の最初の文)
 確かに日本人はあざやかな色はあまり好きではない。歴史上の最も長く存在して来た日本の神社を觀察してみよう。褐色の屋根、・・・。これに対して、中国人のお寺の色コーディネートは主に赤い色と金色からなっている。・・・
 宗教の面から離れて、もっと日常的なことを述べよう。一つ面白い觀察ができることは、人々の服装であろう。シンガポールの洋服に対しての観点は西洋人から影響されているのか、熱帯地方だから暑さによって形成されたのか、とにかく、黄色とか、赤とか、鮮やかな色が人気があるらしい。ひるが入って、日本人の様子を見ると、どうしても洋服の色コーディネートはあまり目立たない気がする。・・・

資料 8

Tの作文 「リー・クワン・ユー」(序論と結論)
 シンガポールの現代歴史は、太平洋戦争が終わってから始まったといわれる。三年と八か月の昭南時代が日本軍の撤退と共に幕を閉じ、シンガポール人は喜びの中で熱烈に英軍を迎えた。しかし、もはや英軍を敵前のように信頼することができなかつた。そして、50年代を迎え、シンガポールは非常に混乱した時代に入った。民族による紛争や共産主義の中学校と労組への浸透活動や半植民地政府デモ、ストライキなどの一連の事態で英政府は仕方なくシンガポールに自治権を与え、やがて独立をさせた。この過程の中で最も重大な人物はやはりシンガポールの一代目の首相、リー・クワン・ユー首相である。彼は、歴史上の人物というより、シンガポールの近代歴史そのものなした重要な人物と言った方が適當かもしれない。
 リー首相ははじめて首相に就任した時、35才という若さであった。(この後、政治、外交、経済の成功、人柄のべられる)・・・
 リー・クワン・ユー首相、シンガポールの第一代のリーダーたちの中のリーダーはこの国にとって、親父のようである。昔の弱い子は今強い、有為な青年になった。しかし親にとって子供はいつまでも子供で、いつまでも保護したい気持ちがあるのだろう。でも、子の意志に従い、手元から放して他人達の影響の下で置かせてやれば、かえって立派な大人になるし、親子関係もよいまま保てる。
 そろそろ引退するリー・クワン・ユー首相は、これを理解しているのだろう。(了)
 (筆者が書いたコメント)シンガポールがリー首相のもとで奇跡的な発展をとげたことは大変幸運なことでした。首相になったのが35才であったとは驚きです。もっとも、明治維新の立役者は、西郷を除けば、みんなそれ以下の年齢でした。今のシンガポールの繁栄を思うにつけ、かつてマラヤ連邦に反対し、それゆえ本国から強制帰国命令を受けた留学生チュア・スイ・リンのこのことやその友人ヘン・フ・ジョンを思い出します。二人は〇〇省と〇〇大学の無理解に悩み、6か月の運動の後に、日本残留を許されました。1960年代は、留学生の身分も実に国家に左右されていたのです。ヘン君は今西ドイツにいます。あの頃は、そういう形で国を捨てざるを得なかった人が何人もいました。(1990-1-20 松岡)

Mの作文 「リー・クワン・ユー」(冒頭・中段・結論)
 シンガポールは建国してからまだ25年しか立っていないので、歴史的に言えば、非常に若い国と言える。そのゆえ、歴史上の偉人または著名人を取り上げることがなかなか難しいことだと思う。
 といっても、やはり、シンガポールの歴史で、強い影響力を持っていた人はたくさんいる。その中に、一番重要な人物は今首相やっているリー・クワン・ユーさんであろう。
 (以下、リー首相のシンガポールへの貢献が述べられる)・・・
 しかし、世の中にやり間違いない人はいないであろう。リー首相はシンガポールのためにずっと働いてきてくれた。だが、彼の労をほめながら、私たちは彼の誤りについても討論する必要もあるに違いない。特に、最近、国内の政治状況が変わってくるにつれて、彼の政策態度の誤りは著しくなってきたとも言える。私は思う。
 (次いで、リー首相の問題点が述べられる)・・・
 私の意見では、時代が変わっていくから、政治も改めて、新しい思想、環境に従って、変わらなければならない。もし、一人があくまで権力を握って、新しい要求に対して頑強に拒否することは、極めて危険なことであろう。
 シンガポールは若い国である。すなわち、政府も柔軟な体制をしなければならぬ。しかし、今の政治傾向はどうしてもリー首相の頑固さが見える。この問題はこれから深刻になるだろう。(了)
 (筆者が書いたコメント)1960年代にシンガポールがマラヤ連邦から脱退する道を選んだ時のことを私は覚えていますが、その時の彼の悲愴な演説が、今でも印象に残っています。(内容は忘れませんが・・・)。ともかく、ずいぶん長い間リー首相はシンガポールの国民の圧倒的の支持の下で率いてきたわけですが、そろそろ後進に道を譲る時期かもしれません。もっとも、日本のように(イタリヤはもっとひどい時がありました)、2年もしない間にどんどん交代していくのも問題です。・・・(中略)リーさんも、シンガポールという国の規模に丁度合った、最優秀リーダーだったのでしょう。マルコスやチャウセスクのような人間でなかったことを幸運と思うべきかもしれません。(1990-1-20 松岡)